

人間行動と文化のマイクロ-マクロ分析

学位論文内容の要旨

認知、感情、知覚、意思決定などを含む人間の心の働きや行動の特性に大きな文化差が存在することは古くから知られているが、近年の文化心理学の発展の中で、そうした心の働きや行動に見られる文化差が、特定の文化の中で共有された認識枠組みの違いに基づくものとする理解が広く受け入れられるようになってきている。また1990年代以降急速に発展した文化心理学における中心的な考え方では、特定の文化を生きる人間が、その文化で共有されている認識枠組みを用いて世界を理解し、またその理解に基づいて行動することによって、文化特定の心のはたらきや行動の特性が生み出されるとされている。同時に、文化心理学では心と文化の相互構築関係が理論的に重要な役割を果たしており、文化特定の認知や行動傾向を身につけた文化エージェントが持つ世界理解ないし世界を認識する枠組みを人々が互いに受け入れ強化しあうことで、特定の文化に特有の認識枠組みの共有が進行するとされている。

本論文の目的は、こうした、これまでの文化心理学において広く受け入れられてきた心の働きや行動の特性についての文化差の説明に、社会的ニッチ構築という観点から新たな解釈を導入することにある。申請者が提案する社会的ニッチ構築アプローチとは、特定の文化で共有された人間や社会についての信念が、人々の行動を規定する誘因構造を生み出しているとするアプローチで、認識枠組みそのものよりも、そうした枠組みや信念を用いて行動する結果として生み出される、広い意味でのインセンティブ構造に着目するものである。このアプローチによれば、認識枠組みや信念の共有は、そうした枠組みや信念を社会的適応の道具として用いて行動する人々によって作り出されるインセンティブ構造が人々の間で共有されていることにより生みだされるものである。本論文では、一連の実験研究を通して、こうしたアプローチの有効性が示されている。

本論文は6章から構成されている。

第1章では、文化心理学のアプローチを中心に、心と文化の相互構築関係を扱ってきた従来の理論、およびそれらの理論に基づき生み出されてきた研究知見のレビューが行われている。こうした理論と研究成果をレビューした後、文化心理学が生み出してきた研究の成果が、文化特定の心や行動の特性と、文化的に共有された信念との間に一貫した対応関係を豊かに記述してきた一方、その対応関係そのものを説明するための研究がほとんど

行われてこなかったことが指摘されている。

第2章ではまた、社会的ニッチ構築モデルに基づく心と文化の関係性の理解が、文化心理学における理解と少なくとも三つの点で異なっていることが指摘されている。第1に、想定されている人間モデルの違いがある。文化心理学では、特定の文化で共有されている意味のシステムを身につけた文化的エージェントを想定しているのに対し、社会的ニッチ構築モデルでは、まわりの人の反応を組み込むかたちで自らの行動戦略を決定する文化的ゲームプレーヤーとしての人間モデルを採用している。第2は、心と文化の関係性の捉え方についての違いである。重要なのは、社会的ニッチ構築モデルでは、文化特定の心や行動の特性を社会環境への適応のための道具として理解すると同時に、そうした道具を用いて採用する行動そのものが、自身が適応すべき環境（社会的ニッチ）を構築するとしている点である。第3は、自己や他者、社会についての文化的信念（文化心理学では、自己観や人間観、世界観などと呼ばれる）の役割についてである。文化心理学において、文化的信念は文化的エージェントの心のメカニズムを生成し維持するものと理解されているが、社会的ニッチ構築モデルにおいては、文化的信念を用いることで、自分の行動に対する他者からの反応の予測が可能となる（また、その結果として、適応行動の採用が促される）点に焦点が当てられている。

第3章から第5章にかけては、心や行動の文化特定性を社会的ニッチ構築アプローチの観点から分析するために申請者が実施した、一連の実験研究の成果が紹介されている。第3章ではまず、従来の研究において東アジア文化における相互協調的自己観の表れとして理解されてきた認知や行動を取り上げ、それらが集団の閉鎖性を特徴とする集団主義的ニッチのもとでのデフォルトの適応戦略、すなわち、自分の属する集団から排除されるリスクを最小化するための適応戦略として再解釈できることを示している。

第4章では、文化的信念に従う行動そのものによって、人々が適応すべき社会的ニッチが形成される過程が分析されている。第4章で紹介された日米比較研究の結果は、集団主義的ニッチに身を置く人々が適応すべき適応環境が、集団主義的な信念を共有する人々が生み出す行動と、その行動の集積として個々人の前に立ち現れる誘因（より具体的には、集団主義的に振舞うことによって生じるまわりの人からの反応）によって形成されるに至るプロセスを明らかにしている。

第5章では、文化特定の心や行動の特性を生み出すにあたり、文化的に共有される人間性についての信念が果たす役割に焦点を当てた研究の成果が紹介されている。第5章では、文化心理学的アプローチと社会的ニッチ構築アプローチによる文化差の予測を検証する研究を行い、従来の研究で日本文化の特徴であるとされてきたいわゆる「協調性」が、実は積極的な協力関係の構築と、集団や他者からの排除の回避という二つの側面に分けられること、そして協力関係を重視するという点では日米差が見られないのに対して、集団や他者からの排除の回避という面では大きな文化差が見られることを明らかにしている。この結果は、日本社会における「協調行動」が文化的に共有された協調的自己観に支えら

れた自発的なものというよりは、集団や関係からの排除を避けるための適応的戦略としての意味を強くもっていることを意味するものであり、社会的ニッチ構築アプローチに基づく文化差の説明を支持する結果である。

最後の第6章では、3章から6章までの研究成果が従来の文化心理学研究に対してもつインプリケーション、および心理学以外の社会科学の諸分野、例えば比較制度経済学などの分野に対するインプリケーションを中心に、社会的ニッチ構築アプローチの有効性についての論考が行なわれている。

本論文の中心は、文化特定の心や行動の特性を社会的ニッチ（すなわち、まわりの人々からの予測可能な一貫した反応パターンとしての誘因構造）への適応行動として分析する社会的ニッチ構築アプローチを紹介した第2章、および社会的ニッチ構築アプローチと文化心理学的アプローチが生み出す文化差についての予測を比較検証した、第3章から第5章で紹介されている一連の文化比較研究にある。これらの研究の結果は一貫して社会的ニッチ構築アプローチの有効性を示しており、今後の文化心理学の発展に対して指針を与えるものである。

学位論文審査の要旨

主 査 特任教授 山 岸 俊 男
副 査 准教授 結 城 雅 樹
特任教授 煎 本 孝

学位論文題名

人間行動と文化のマイクロ-マクロ分析

本論文の目的は、1990年代以降急速に発展した文化心理学においてこれまで広く受け入れられてきた、認知、感情、知覚、意思決定などを含む人間の心の働きや行動の特性に見られる文化差の説明に、社会的ニッチ構築という観点から新たな解釈を導入することにある。申請者が提案する社会的ニッチ構築アプローチとは、特定の文化で共有された人間や社会についての信念が、人々の行動を規定する誘因構造を生み出しているとするアプローチで、認識枠組みそのものよりも、そうした枠組みや信念を用いて行動する結果として生み出される、広い意味でのインセンティブ構造に着目するものである。このアプローチによれば、認識枠組みや信念の共有は、そうした枠組みや信念を社会的適応の道具として用いて行動する人々によって作り出されるインセンティブ構造が人々の間で共有されていることにより生みだされるものである。本論文は、一連の実験研究を通して、こうしたアプローチの有効性を示すことを目的としている。

本論文の第3章から第5章にかけて紹介されている一連の実験及び調査研究は、この目的を十分に果たしているものと判断するに足る成果を示している。第3章で紹介された研究は、従来の研究において東アジア文化における相互協調的自己観の表れとして理解されてきた認知や行動が、集団の閉鎖性を特徴とする集団主義的ニッチのもとでのデフォルトの適応戦略、すなわち、自分の属する集団から排除されるリスクを最小化するための適応戦略として再解釈できることを示している。第4章で紹介された日米比較研究の結果は、集団主義的ニッチに身を置く人々が適応すべき適応環境が、集団主義的な信念を共有する人々が生み出す行動と、その行動の集積として個々人の前に立ち現れる誘因によって形成されるに至るプロセスを明らかにしている。第5章で紹介された研究は、従来の研究で日本文化の特徴であるとされてきたいわゆる「協調性」が、実は積極的な協力関係の構築と、集団や他者からの排除の回避という二つの側面に分けられること、そして協力関係を重視

するという点では日米差が見られないのに対して、集団や他者からの排除の回避という面では大きな文化差が見られることを明らかにしている。

こうした一連の研究の成果は、人間の認知や行動と適応環境との関係について、従来の文化心理学研究とは異なる観点からの分析および説明を提示し、その説明の妥当性を一連の実験研究を通して示すものである。従来の文化心理学研究では、ある文化を生きる個人が持つ認知、感情、知覚、意思決定などの心の特性と、その文化で広く共有されている意味のシステムとが相互に構成しあう点が強調されながら、その多くが人々の心の文化差の記述にとどまり、実際に心と文化とが相互に構成しあうプロセスの分析を試みた研究はほとんど見られてこなかった。本論文は、人々の行動そのものが作り出す誘因構造としての社会的ニッチに焦点を当てることで、社会的ニッチへの適応という観点から、特定の社会で共有された信念や、そうした信念に導かれる行動の差を分析するための理論モデルを提示している点、そして、その理論モデルの妥当性を一連の実証研究を通して明らかにしている点で、これまでの文化心理学的な研究とは大幅に異なっており、今後の文化心理学の発展に対して大きな貢献をなすものであると、審査委員は一致して判断した。

以上をまとめると、本研究は、これまで文化心理学が扱ってきた文化特定の認知や行動の多くが、人間が集合的に構築する適応環境についての信念、およびそうした信念を通して生み出される適応戦略として理解されることを示すと同時に、そうした適応戦略が適応すべき社会的環境としての社会的ニッチを生み出し維持しているという、社会的ニッチ構築アプローチの有効性を示しているという点で、今後の文化心理学研究に対して大きな貢献をなすものである。本審査委員会はこの点における申請者の研究の成果を高く評価し、全員一致で、本論文を博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。